

C-57 パンティ・ストッキングとストッキングの人体に及ぼす影響

大野静枝(日本女大) ○中島洋子・吉田敬一(昭和大) 山本弘(国立公衆衛生院)

目的： 一般に、ストッキングの着用が少なくなり、パンティ・ストッキングが着用されるようになった。しかし、パンティ・ストッキングの着用感が夏季において必ずしもストッキングに比して優れているとは思われない。そこで、パンティ・ストッキングとストッキングの安静着用時の着用感と生体の反応を比較検討した。

方法： 実験は、夏季に人工気候室において行なった。被験者は21才の比較的体型のよく似た健康な女子4名。服装は下着にブラジャー、ショーツを、上着には半袖シャツ、ミニスカートを着用させた。各被験者ともパンティ・ストッキング、ストッキングの着用においては、被覆が常に一樣になるようにした。被験者の姿勢は、安静椅座とし、はじめに、温度25℃、湿度70%に1時間30分滞在後、35℃、70%に1時間30分、さらに、20℃、70%に変化せしめて1時間滞在した。測定項目は、皮膚温、直腸温、脈拍数、体重減少量、指血流量、呼吸数ならびに温度感覚のききとりである。なお、室内気速は0.1~0.3%であった。

結果： 温度感覚は、25℃においては明確な差は感じられなかったが、35℃及び20℃において、パンティ・ストッキングの方が、それぞれ蒸し暑く、また暖かかった。それに対して、身体機能で有意の差がみられたのは指血流量であり、その他の項目については明らかではなかった。このことよりわずかな被覆面積の差が、温度感覚をかえ、四肢末端の循環に影響を与えるものと考えられる。しかし全身機能に変化がみられなかったことより、さらに詳細な実験を必要とする。